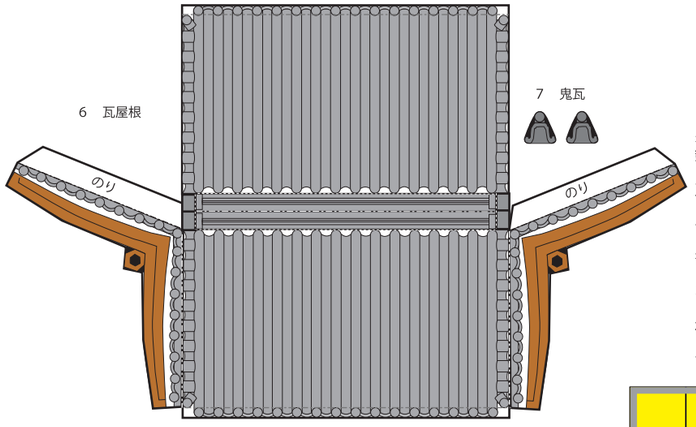
みんなで作ろう！埋文クラフト

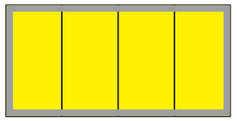
県指定史跡甲府城跡　建物シリーズⅢ　鍛冶曲輪門② 屋根　1/100

埋文やまなし51号の本体に屋根を合体させて鍛冶曲輪門を完成させよう！



完成図（後ろは49号・50号付録の稲荷櫓）

鍛冶曲輪門（かじくるわもん）は、甲府城の楽屋曲輪（がくやぐるわ）と鍛冶曲輪をつなぐ門で本丸の南西側に位置します。現在は山梨県庁東門側から甲府城へむかうところにあります。発掘調査の成果から平成９年に復元しました。門は薬医門という形式で、前の親柱２本、後ろの控柱２本のうえに本瓦葺きの切妻屋根がのります。屋根は前側に少しずれているので前の柱はやや太いものにします。門の横に潜り戸をつけています。



甲府城の築城を始めた加藤光泰、そして完成させた浅野長政・幸長親子、江戸時代に親藩以外で初めて甲府城主になった柳沢吉保ら歴代大名を1/100で再現！

特別付録　1/100　歴代大名と甲府勤番士・門番だ。　建物シリーズと組み合わせて遊ぼう！

コラム「伝統的な甲府の菜っ葉、長禅寺菜（ちょうぜんじな）って…？？」の巻

栽培中の長禅寺菜

長禅寺菜は、漬物に適した漬け菜と呼ばれる野菜で、江戸時代の終わりに甲府市の長禅寺のあたりで栽培されたことに始まる伝統的な郷土の菜っ葉です。

江戸時代末期の風俗慣習の見聞録である『甲斐廼手振（かいのてぶり）』には、晩秋から初冬のころには赤い襷（たすき）を着けて、荒川で並んで菜を洗うことが盛んに行われ、一大行事として楽しまれていたと書かれています。しかし、江戸時代の終わりから甲府城下に暮らす人々の食卓に上っていた長禅寺菜は、市場や食卓からもほぼ姿を消してしまいました。伝統的な食材も、貴重な文化的資源です。江戸時代から近年まで食卓を飾ってきた食材の魅力を伝えること、そして地域の伝統野菜を守るとともに、歴史的な食文化を後世に残したいと考えています。

イベント「ひらけ！玉手箱」において長禅寺菜の料理をふるまった「こうふるふぁーむ」のみなさん。

今回のコラムを担当した上野です。甲府城下町遺跡の調査に携わっています。甲府城下町の痕跡を探しながら甲府市内をぶらっと歩いてみませんか？

編集後記

最近田んぼのあぜにはえているツルマメが縄文時代に食べられていた食材ということを教えてもらいました。ツルマメはダイズの原種のひとつとのことで、煮て食べたところ、ほんとうにダイズの味がして、びっくりしています。（池）

埋文やまなし　第52号
発 行　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923
☎055-266-3016
印 刷　青柳印刷株式会社

山梨県埋蔵文化財センター報
埋文やまなし　第52号
2016.12/09
http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/

pickup

発掘から見た山梨の信仰

今回の発掘調査の舞台になったのは山梨市隼地区に所在する隼遺跡（はやぶさ）。笛吹川に沿って走る国道140号の東にある隼山の急峻な崖を40mほど登ったところに大黒窟（だいこくいわや）、大士窟（たいしいわや）と呼ばれる2つの窟が空いている。この窟こそ中世、江戸時代を通じて信仰の対象となった場所である。

大黒窟は、崖の岩盤を人工的に刳り抜いた幅4.5m、高さ1.8mの長方形。入口から5mほど奥の壁には、やはり岩盤を削って作った仏像を置くための須弥壇（しゅみだん）がある。すでに天井が崩落して底面を覆っていたが、それらを取り除くと、火を焚いた痕跡が確認された。また底面には、手前から奥にかけて胴木（どうぎ）を渡した跡があり、ここに木造の建物があったことも新たにわかった。形態から13～15世紀のものである。

一方、大黒窟の東側にある大士窟は、自然の窟を一部加工した江戸時代の宗教施設だ。奥壁にはさらに３つ、人がかがんで入れるくらいの横穴があり、三体の仏像がそれぞれ置かれていたらしい。また窟の両側面にはほぞ穴の痕跡があり、仏像は間仕切りで仕切られ、間仕切りの手前で火を焚いて礼拝が行われていた。江戸時代の茶碗やおちょこなどが出土しており、ここで飲食しながらマツリをおこなっていた。まさに民間信仰の場であり、それは現在も続いている。

大黒窟（左）と大士窟（右）

-NEXT PAGE インタビューで明らかになる隼遺跡-